

千島の想出 (IV)

館協操



擇捉再遊

a 紗那附近

紗那は北西海岸の中部なる小市街で、紗那川の河口に位した擇捉の主邑である。しかし紗那港は港という程のものでなく、一寸した入江に過ぎない。

根室と紗那間は一五〇海里。寛政十二年幕府は近藤重藏が高田屋嘉兵衛に本島を開發させた時、ここに會所を置き、幕吏が在勤し、南部津輕二藩の兵が戍衛した文化四年四月露人がユーナ、アホシの二船に乗つてこの地を襲い、わが兵應戦したが力及ばず、時に居あわせた間宮林藏などは決戦を主張したが、用いられず、根據地を振別に移した。その後明治十八年ここに郡役所を置き、更に三十年紗那支廳としたが、三十六年支廳を廢し、村役場を置き敗戦までに至つたのである。私の行つた時には村役場の他、警察署、測候所、營林署、道廳千島開發調査所などがあり、戸數は二九五、

そのうち紗那部落には一〇〇戸位であつたらう。

紗那では驛遞に泊つた。北海道ではもうそのころ驛遞というものはなかつたが擇捉にはまだあつた。そして陸の交通はほとんど馬のみに頼つていた。馬車の通える所はごく一部で部落間の運搬はやはり發動機船によつていた。私達が馬に乗る時には、前以て驛遞に馬の使用時間を通告しておくと言馬を用意してくれていたものである。東海道五十三次のな趣もなかなかあつて旅情はこれによつてもそゝられたものである。電話連絡のないところなど「明日何時頃行くから用意しておくように」と、馬でそこに行く人に連絡をたのむ時など、一足飛びに一世紀も戻つたような感じのしたものである。

紗那の驛遞は、擇捉島第一の宿であつたが、その時には風呂がなく、夕方になると近くの風呂屋に行つた。夕方などゆくと、よく料亭の女達が船員の連中と、一枚の女湯と男湯で大聲にきわどい話をやりとりして

いたものである。私達はザブ／＼と流し場に湯を流さざるを得なかつた。

紗那の部落の西南方にある砂丘にはすばらしく壮大なハマナスの群落が開き、そこを馬で行く時は得もいわれぬ蒸せるような芳香が旅の心にしみた。また紗那の東方一軒餘のところには紗那沼がある。このほとりは雄蘂の五本あるエトロフヤナギがあるので、二回それを見に行つた。エトロフヤナギというのは、亜種としてはカムチャツカとエトロフより他に知られていない珍しい柳である。

北海道水産孵化場擇捉支場の所有していた孵化場の一つは紗那市街をさる東方二軒、紗那川の一支流に臨んだ所にあつた。構造は大體千歳の孵化場に似ており非常に環境のよいところになつていた。紗那から一軒半ばかりのところを渡るが、そこで見た一〇町歩ばかりにわたるエゾノコリンゴ林（方名サンザシ、林分高一〇米、胸高直徑四五—五〇釐）は今でも私の眼に残つてゐる。たゞ心残りは一ひとつ、紗那の名物石鍋を味つてこなかつたことである。

それから紗那に在る間に東南方紗那川に沿う通路をとり、四四二米の峠（焼山）を越して一六軒ばかり進み、濕原を調査に行つたことがある。この年は鰲が横

行してゐるといふので、好々爺然とした森林主事武田君ともう一人屈強な馬の達者な若者がついてくれて、アイヌ犬を五頭もつれ、二人ともラツバを肩からさげてきた。ともかく一人一人にあうわけなし、一寸探險氣味で面白かつた。殊にその濕原が山中の鰲の遊び場と知られたところなので、營林區署でも用心に用心を重ねてくれたらしい。その時には五万分の一の地圖もなかつたので、どこが見えたのかさつぱり判らなかつたが、島の中心に入つた感じは充分に味わらして貰つた。

6 紗那からポロス

八月十五日武田君と二人紗那をたつ。紗那と別飛の間は約一六軒、最高點一一五米の低い峠越である。道は極めてよく、擇捉銀座通といつてもよい。この道はチリツブ火山彙（散布山一五八七米、北散布一五六一米）を主體とするチリツブ半島の底邊を横斷するようなどころである。峠の上部も殆んど平坦な感じで笹原と疎林である。別飛は擇捉としては相當な部落で、オロヨ、紗萬部も近い。紗萬部は別飛から北方八軒、港口が東に向い、風浪激甚の時は本島における唯一の避難港である。ゆつくり別飛附近を探り、海濱群落や濕原群落調査に半日を費して泊る。この日白雲たなびく

チリップの山の眺めが心を爽快にしてくれた。

別飛から東は道も細くなつて長々とした單調な海岸線の草原を行く。八時別飛發、六番地、七番地、八番地などと無造作につけられた處々の一―二軒の番屋風景を遠見しながら馬を東に飛ばすこと一三軒。その間トコチャ、ビヨノツ、ボンハンモンベツなど一寸日本離のした地名の番屋を経た。オンニハモンベツというところから約一二軒ばかりの間は少し山寄りに入りそれから更に四軒砂丘の上から砂濱を見るように東行してポロスの驛遞に入つた。

ポロスという一寸洋風な響をもつているので、小粋な部落でもあるのかと思つたら大ちがい。ポロス川の河口に位置し、四〇六米のポロス山を南西四軒に背負い、すぐ最北の背には八〇米の丘陵がある。驛遞は西風を受ける以外は全く風から護られたようにガツシリ建つていて、どことなくホツカリとしたあたゝかさを感じさせた。驛遞の他には番屋が二、三軒あつたのみである。

その日の午後はトウロに行こうか、リチャルに行くか一寸考えさせられたが、島の太平洋面とオコツク面をつらぬく最も短いところという點と、留茶留原野が樺提代表の放牧原という點とにつられて東ルチャル

に行つた。ルチャル原野は東西四軒南北六軒、高低差四〇米東にルチャル山（四三七米）西に丸山（一六三米）があり、一見平坦に近いようなところで、春から秋にかけては快適な放牧地として利用されていた。この日は霧が深く視野を限られた道の兩側にはどこまでも笹がつぶいた。武田君の馬を見失わないように後からつぶいた。太平洋岸の東ルチャルには人氣ない番屋が一軒あつたのみで、潮騒高き砂濱に、荒々しい冷々とした大洋を感じた。

夜は濃霧、驛遞の主人公と話しこむ。この閑寂なる地も主人にとつては悠々たる樂天地で、馬産が本業らしく、話に出てくるスケールは濫くして壯大、やはり島らしさをしみんく味わされた。「エトロフよいと一度はおいで」と唱いたくもなる。

五万分の一の地形圖が手に入つて見るとなぜ一日延してトウロに行かなかつたか、私の遺憾は加わるのみであるが、その翌日には馬首を紗那に向けたのである。そして晝に樺提水産會の漁場で、うまい鮭を御馳走になつて、鮭鱒の話に耳を傾けた。

紗那一年前

八月一八日、早朝紗那發。紗那から西南四軒、海岸沿に丘陵下部の草原を行くと有蔭^{アリモエ}である。有蔭は紗那

の離れ部落のような感じがする。ここから留別まで上り一〇軒、下り一〇軒の登山道にかかる。峠の頂は三七〇米位であるが、頂上はハイマツ群落で、高山景觀を呈している。この頂きの西方二軒に頂上の廣い登山（五六六米）があるが、峠とその間にはハイマツがぎつしりつまつている。またこの峠（厳密にいうと峠の頂きを一寸下つたところ、三區下記の方から上つたところ）にトドマツの北東限の限界がある。面白いことにより北に行つてもよさそうなエゾマツ分布の限界は既にヒトカツプ山麓で終つている。換言すれば北海道の我々に親炙している針葉樹はここで終りである。峠を少し下つた所に三區と名づけられた一軒屋の宿泊所があつた。

この山道の下りで、ギャロツプの際中、私の馬が穴にでもつまずいたらしく、私は見事落馬、その時どうしたはずみか、スル／＼と馬の首をずりおちて、私の體は後向きになつて大地にドサンとおろされた。はつとして首をあげると馬の首が無い。驚いた私は、腰の痛いのも忘れて、馬のそばに行つて、ツラ／＼見るとどうしたとか、馬の首は前肢の中に入つているのである。そしてどうしておこしたか忘れたけれど、馬を起してやつたら、馬もキヨロリとした顔をした。こん

な落馬振は始めてであり、その後もやつたことはない。この時も武田君と二人連であつたが、武田君も餘程驚いたらしい。留別近くなつてからの下りの途中、留別から六軒ばかり手前のトドマツ林をゆつくり觀察し、快晴の峠路を楽しんだ。疲勞も少し加つて來たので、最後の四軒ばかりは悠々とした。

留別港というが、それは一向に港らしい地形態を持つていない。留別川は留別の河口に位している擇捉オコック面の有數な部落である。ここにいう有數な部落の目標は郵便局、學校、駐在所の存在である。ここから島の本街道は南に折れて太平洋岸に向い、年朧に出オコック面には道らしい道もないくなり、部落らしい部落も南部の内保までない。留別では色々牧野の調査もやり二泊した。そして一日は一六軒西方の野斗路岬の草原を尋ね、岬の先端より五軒南下して振別に出、更に一六軒留別に戻つた。歸りには留別の西四軒餘のラウス沼で小半時遊んできた。その日の行程の大部分は海岸草原であつた。振別というのは、曾て榮えた部落であつたが、昔の影がどこかに残つているうらさびれた小さな聚落であつた。

終日快晴で東にチリツプ、西にヒトカツプ、アトサヌプリ、そして時にベルタルベ、南すればタンネモエ

の諸山を望み、心限りなく樂し。また沖に眼をやれば秋近むオコックの色が空の清澄さを湛え、平坦な海岸段丘には八千草が咲き亂れ、風衝地帯のグイマツが靜かな盆栽姿をくねらせていた。

なお留別と年朮の間は約一、二軒で、ほとんど平坦で道は好い。留別近くには長徑二軒の留別沼があり、それから八軒位で年朮湖畔に出る。その間に代表的なグイマツ林がある。この時の旅行目的の中心のひとつは實はこの地點にあつたので、非常に緊張と興味で歩いた。年朮泊りなので、道が年朮湖に出あつた所から東に入りセセキ川の谷に沿い往復八軒の寄道をして瀨石温泉によつてきた。途中の風景にも温泉にも格別の趣がなく、温泉は全く平凡な田舎風の一軒屋である。たゞし靜寂をこの上なく愛する人にはこんな所は又とないであらう。温泉で辨當をつかわしてもらつた。

年朮は太平洋測としては中部代表的な部落であるが單冠灣砂濱に沿つて細長く家並のあるうす暗いところである。たゞ東はずれの鯨場だけが目立つて大きい。年朮には三泊した。グイマツ林を精査したり、砂丘調査をやつたり、南東五軒のヤンケトウに行き、レブン沼、ボン沼のあたりもさぐつた。いずれも大きくない海岸近くの湖沼である。日をかえてまた年朮湖に行き

孵化場もおとずれた。年朮湖の孵化場（年朮事業場）には年朮川の経路に沿つて行つた。この歸り道のことであるが、濱邊に近い年朮橋の附近にやつてきた時、に馬鹿に大きな聲でどなつてゐるのがある。軍國風の吹きすさんでいた頃なので、號令の練習でもやつてゐるのだらう位に考えていたところ、やがて顔色の變つた青年に出あつた。「今熊がいたんです。そして向いの山腹をかけあがつて丁度今見えなくなつた所ですよ」と息をはずませながら昂奮もさめやらず語つていた。部落に歸つてから、私達の今日通つた道でも今朝道に熊が横になつていたという。今年馬鹿に熊の多い年だそらだ。

年朮の鯨場は忙しい時であつた。昭和二年の晩夏ここをおとずれた時には靜閑すぎる靜閑を味わされたものであるが、今は活氣にみちみちていた。とある夕、入船の汽笛に誘れて東はずれの鯨場に急いだ。鯨場のかがり火は鯨油に赤々と燃え、鯨場はそのものは生きもののように潑刺としていた。船が入るや鯨の巨體はウインチに巻きあげられ、五條橋の牛若丸でも思出させるように手際のない豪壯な解剖刀が素早く巨體に動いてゆき、チエインはガラゴロとひかれて、解体はつゞけられ。海は紅にそまつた。

d 年崩から入里節（太平洋面）

八月二十三日早朝年崩後、今日は武田君と更に年崩駐在の森林主事安部君が加わり、馬三頭をならべる。

年崩から天寧までは約一六軒、單冠灣にそつた單調な海岸をゆくのである。天寧からトマカラウスまでは約四軒、廣大な草原をゆくのであるが何かこの間では飛行場の設備をしていたらしく、そういう場所に立入るのはどうかとすつかり遠慮してしまい、それに海霧日和であつたので視野は利かず何とも單調な行程であつた。それから具谷^グまで一二軒も同じように單調な海岸線傳である。この日の馬は馬鹿に走りたがるのでかなり走らせたが、後で聞くと草競馬に使用したことがあつたといふ。この日は一日單調であつた騎乗のみが思出に残るのみである。唯ある部落で馬上から道を聞いた時、背戸の枯枝で説明してくれた娘の秀でた眉目は沙焼こそしておれ今に忘れ得ぬ端麗さを持つていた。

具谷の宿は新婚夫婦、これも似合の若さと美しさをもつていたので、何だか邪魔したようですまない氣さえた。一行は三人（武田君と安部君と私）に更に出迎えにきてくれた入里駐在の森林主事佐藤君を加えての水入らずの四人。年崩から持つてきた鯨で刺身をこしらえるやら、スキ焼をするやらで、大いにメートル

をあげた。明日はなごらく行を共にしてくれた武田君とも別れるので、その盃には一入の味が含まれていた。午前中、小學校の先生に案内されて附近濕原のグイマツ林をゆつくり調査した。具谷から入里節^{イリノ}までは二〇軒、單調な海岸線で殊に砂地草原が多い。道路という程のものでなく、歩道程度のもので、草に埋もれ勝ちのところもあつた。途上の野塚は一寸した聚落である。入里節は南部太平洋岸の入口ともいふべき部落であり、岩礁の間にある潤のようなところに位置している。

この入里節から擇提南部オホツク海面の入口部落ともいふべき内保へは一〇軒ばかり東行すればよい。この道は留別と年崩との間にも相當すべきよいもので、最高點が高距八〇米前後である。並保へは年崩、入里節の森林主事と三人で馬を並べて行つた。この年は前にも述べた通り、熊が多いので、この道路でも毎日熊に會つてゐる。滞在中も顔の色を變えて驛遞に飛びこんできた人を二度も出た。「熊がいると馬が先に驚くそしてどうしても進まなくなるか、どたん場に行く」と馬が立つてしまふ、下手な人は丁度熊の前にコロリとおちる」と少しからかい氣味に部落の人が説明するに困つた。

この道は大體單調な道で大部分が若い廣葉樹林を通

り、内保近くで濕原が出たり、針葉樹が見えたりする。内保は南北一〇軒東西四軒ばかりのしまりのない入江なる内保湾中部に位し、北にはアトサヌブリ（一二〇五米）が聳えている。郵便局、學校、警察もあり、内保川の河口に臨み、戸數は四〇近くあるが、ここも砂にまみれた感じのする部落であつた。

これから神居古丹に行く豫定でいたところ、局に電話が來ていて發動機船が野塚に來ているからすぐ戻るようにもとの連絡があつたので直ちに引返した。丁度中頃の澤に來た時、一足先に出發した驛遞のオジイがジイツと立ち止つている。その傍に馬を寄せた時、オジイは心惜しそうに「今まで熊の姿が見え、今あの角をまがつたところだ」と谷地^{ヤチ}めいた澤の一角を指した。驚いたことに、隣の部落まできていた發動機は低氣壓のためその日はやつてこなかつた。千島の船待は前から訓練されているのでおとなしく自然の「時」を待たつた。

低氣壓は内保から戻つた翌日にやつてきた。しかしうねりがとれないので船が來たのは四日目である。暴風雨のあと風の強い丘の上にたつてアトサヌブリ、ヒトカツブレ山のスカイラインを追い、また入里節の里を眼下に見ると、人間が人間をなつかしがる氣持が、

何ともいえず湧いてくるのをおぼえた。ここに滞在中は遠くにも行けず、散歩程度に南西二軒餘のマトルザルのあたりまで行つたぐらいである。

宿の待遇も親切だつた。それに北星出のお嬢ちゃんも美人で清純で口數は少なく、居心地はよかつた。ここで私は私と同じように船待している根室の呉服行商のオジサンに會つた。このオジサンは話好きで將棋好きだつた。その將棋は勿論ホ將棋の代表的なものだが、さしている時が如何にも愉快そうで、勝負に囚われず、將棋そのものを心から楽しんでゐる。負けた時にも、詰められた王様を見てニッコリ笑いながら「あゝつんでしまつたかな。」私はその時の笑顔を忘れず私の今日の處世訓にもしている。

IV 擇捉後記

擇捉は私の歩いた昭和十五年の夏あたりも相當警戒はやかましく、殊に海岸線には眼に見えない眼が光つていた。そして例の眞珠湾攻撃には、單調極まる單冠^{ヒトカツブレ}湾一体が相當な役割を果したのも、よく人の知る事實である。そして昭和十七年頃から主幹道路はトラツク道路となつてゐる。しかし私の印象に残つてゐる擇捉は少しの軍國色もない樂園南千島擇捉の自然相であり人情こまやかな社會相である。道路こそ細けれ、不便

でこそあつたが、私はほんとうによき時に旅したと思つている。それで私の氣になつたのは島のよき人々がその後如何なりしやということであつた。

昨年（昭和二十五年）の晩秋。昭和新山の植生調査に行つた時、洞爺湖畔で、一寸人ずれのしていない、しかも人なつこいクリ／＼とした眼をした別飛の娘丁ちゃんに會い、別飛を中心とする地の人が大體無事歸國したことを聞いて一安心した。冷々とする洞爺湖畔の夜を、薪のストーブにあたりながら、終戦直後天寧から別飛へのトラツク行、それからトウロ孵化場に義兄の看病に行き、ソ聯軍の進駐となり、時にその姉と短刀を以つて山に逃避したこと、病兄をかこみその家族と男装してボートに乗つてトウロ漁場への合流、床屋の娘に生れて床屋の嫌だつた彼女か「とうさんがかわい相になつて」とバリカン、カミソリをにぎつての別飛二年の眞剣な生活。オーヨの集結から大泊を経てダモイ。事實は小説より奇なり。その話は三晩つゞいたがまだ終らなかつた。「現在に幸あれ、そして將來によりよき幸あれ」蝦夷富士に向い、湖心をみつめ私は曾ての擇捉の人達のために祈つた。

（北海道大學教授）

マス採卵奨励の第一位

支場は北見・事業場は標津え

本年度のマスも西越採卵場の十一月三十日をもつて事業を終了した。結果は捕獲數において三七・七%の増加を見たが採卵數で一八・四%の減を示し、あまり良好とは言えなかつた。

各支場及事業場を收計の結果支場一位は北見支場で虹別、渡崎、天鹽、千歳、十勝の順になつている。事業場では標津事業場が一八〇二・一點の優秀な成績をもつて第一位となり岩尾別、湧別、幌内と續いている。

表彰式はサケの事業が終了して四月頃になる豫定でサケの方はもう既に目標を遙かに突破する好成绩を示している。

奨励金は採卵場別に支場で取纏め本場係の方に請求するようになってゐるがマスの方でまだ提出していない支場は大至急提出して下さい。